子どもたちよ。キリストのうちにとどまっていなさい

野田　尚広



左が尚広さん、ご家族といっしょに

私はいわゆる集会クリスチャン二世です。自分の人生を振り返りますと、イエス様に感謝せざるをえません。大きな愛をもって、導いてくださったからです。何よりも嬉（うれ）しいことは、クリスチャン人口が一％ほどの日本で、クリスチャンの両親から生まれたことです。両親は若いころキリスト集会で出会って結婚しました。

私は現在精密機器メーカーに勤務しており、二〇一四年末からオランダのアムステルダムに駐在員として赴任しています。入社してから品質保証、販売推進、製品立ち上げという様々な部門に携（たずさ）わってきましたが、一貫してアメリカにあるパートナーの会社との窓口を業務とし、英語を日常的に使う仕事をしています。思い返すと、今の会社に内定をもらったときに人事担当者から「野田君は英語は大丈夫だよね」と聞かれ、ゾッとしたことを思い出します。

私は、中学一年から高校を卒業するまで、カナダのバンクーバーで過ごしました。しかしカナダに行った当時から、英語に対して大きな苦手意識がありました。

中学にもなってカナダへ行くことになった経緯はこうです。私の家族は少し変わっていて、というよりも、父親が変わっていたというのが正しいかもしれません。中学の一学期が終わろうとするとき、突然家族全員でカナダに行く話が持ち上がりました。父はそのときすでに脱サラをして、自営業でしたので、家族全員で学生ビザを取得して、一年間だけ滞在するということでした。親は海外で生活することを子どもに打ち明ける前にいろいろと祈ったこととは思いますが、今考えても、この決断は突拍子（とっぴょうし）もないものでした。

カナダでの生活が一年経つころ家族会議を開いて、滞在を延長することになりました。父は現地で仕事をするようになり、結果としては、自分が五年間、姉が七年間、弟が十年間、両親は実に十二年間もカナダに留まることになりました。すべては主がなさったみわざであった、と今は確信できます。バンクーバーの地に、多くの素晴らしい信仰を持つ兄弟姉妹を与えてくださったからです。

あなたを贖う主、イスラエルの聖なる方はこう仰せられる。「わたしは、あなたの神、主である。わたしは、あなたに益になることを教え、あなたの歩むべき道にあなたを導く。

（イザヤ　48・17）

カナダでの生活は大きな試練でした。入学した初日にクラスを間違える、というハプニングから始まり、英語がまったく分からない中での授業は非常に苦痛でした。家に帰ると、教科書を開くのですが、一文読み進めるのに、単語帳を開き、少し進むとまた開くことの繰り返しで、一つの章を読むのに何時間もかかりました。それに加え、学校では友達ができず、自分の殻（から）に閉じこもりました。昼食も一人、廊下

を歩きながら済ませるという生活が何年も続きました。家族も同じように苦労していたと思いますが、子どもだった自分は両親や兄弟にあたりちらして、ストレスを発散させていました。

私の家族は両親のほかに姉と弟がいますが、今でもとても仲が良いです。特に家族が救われてからは、何でも話せる仲となり、本当に心いやされる大好きな存在になりました。今になって考えると、異国の地で、家族が皆それぞれ悩みや苦しみを通して、同志となり、後にイエス様という存在により固く結ばれたからだと思います。

私がイエス様に出会ったのは十七歳のころ、カナダで異性との問題を通して、ペチャンコにされたときでした。幼いころからイエス様の存在は自分なりに信じていましたが、思春期を迎えると、イエス様の存在は自分の自由を規制すると思い、煙たい存在となりました。当時付き合っていた女性は未信者でしたので、関係が悪い方向に行き引き返せなくなったとき、罪が明るみに出されました。真っ暗な自分の部屋のベッドに一人横たわり、主に助けを求めました。そのとき初めて、イエス様を十字架につけて殺したのはこの私だという思いが与えられました。子どものころ悪いことをしてしまったとき、親は自分を叱った後、一緒に祈ってくれました。しかし、このときは叱ることはせず、ただ黙って一緒に祈ってくれました。振り返ってみると、このときペチャンコにされ、主に出会うことができたのは本当に大きな恵みでした。現在二人の子どもの父親となりましたが、自分もこのような親でありたいと感じています。

幼いころから集会に集って感謝だったのは、イエス様の存在自体を否定することはできなかった、ということです。それは、イエス様に祈ったことが聞かれた経験、軽井沢のバイブルキャンプで見た大人たちの心から喜んでいる姿、そこで聞いた数々の証（あかし）、こ

ういったことから子どもながらに福音を真理としてとらえていたからだと思います。

イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。

（ルカ　19・5〜6）

私は、大学に進学するために単身で帰国しました。大学は楽しく、一方で虚（むな）しさを感じるものでしたが、順調に卒業し社会人となりました。入社一年目、落ち込むことが多くなりました。それは、入社してすぐ英語を多用する部署に配属されたからです。海外経験者でしたので、当然といえば当然かもしれませんが、帰国子女としてのレッテルを貼られていました。英語はできて当たり前と見られ、入社して間もないころから、外国とのＴＶ会議の司会進行、通訳を担うことになりました。ＴＶ会議があるたびに、イエス様に助けを求める日々でした。会社の制服には、ポケット新約聖書を忍ばせ、トイレで隠れて読み、主に助けてくださいと祈る毎日が始まりました。

そのころ集会で、同じようなタイミングで社会人となり、自分の無力さを日々感じていた兄弟と出会い、毎週のように二人で地方キャンプに参加するようになりました。今でもこのころのことを思い出すのですが、主をいつも近くに感じ、考えられないほどの喜びに満ちた日々で、本当に楽しい時間でした。そのころから聖書のみことばの力や、信じて祈ると主は必ず聞いてくださることを体験的に知ることができるようになりました。読んでもピンと来なかった聖書のみことばが、聖書から飛び出してくるような感覚がありました。家族との交わりも、主にある兄弟姉妹としての関わりになり、心が通じるようになりました。

10人の証し

Unser HERR lebt

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。（エレミヤ　15・16）

そのうち、私は、主にある結婚を望むようになりました。ベック兄を通して今の妻と付き合うことになり、付き合って二カ月という短い間でしたが、プロポーズをし、二〇一二年九月に結婚に導かれました。二〇一三年七月には長女、二〇一五年十一月には長男が与えられました。今は妻と二人で慣れない子育てに奮闘しています。

主にある姉妹との結婚へと導いていただき、主に感謝していることは、夫婦で一緒に祈れることです。まだ救われていない妻の家族の救いのこと、仕事で不安に思っていること、子どもたちの成長のこと、判断すべき一つひとつのことなど、聖書を読み二人で祈ることで、主から何とも言えない平安が与えられます。

私は結婚するまでの何年もの間、結婚式のご奉仕をさせていただいていたため、ベック兄の結婚式のメッセージを何度も聞いてきました。頭では分かっていたつもりでしたが、結婚して初めてその意味を、少しずつですが体験的に知るようになっています。ベック兄のメッセージで特に心に残っている箇所は、「何かがあって二人の間に重苦しい空気が流れるようなときは、『悪かった、本当にすまなかった』という一言を言うことが大切です」というところです。これはとても難しいのですが、意識して実行するのとしないのでは、心の平安に雲泥の差があると感じています。

けんかをしたときや、語気が強くなるときは、決まって自分の方が正しいと思っているときです。「これだけは間違いない、相手が間違っている」。しかし、そこで自分の主張を通したとしても何とも言えない敗北感に襲われます。自分がみじめな状態にあるときにこそ、まず主にごめんなさいを言うことで、相手に

素直に謝ることができるように導かれるのは、本当に感謝なことです。

以前、集会のある方の結婚式に出て、「相手のために生活をする結婚生活」、つまり「自己否定を伴う結婚生活」こそ、幸せな結婚生活を送る秘訣であることを改めて聞き、本当にそうありたいと心から思いました。私たちにもこれから多くの問題が出てくることと思います。しかし主はどのようなときにも、私たちよりはるかに高い意志を持って導いてくださるので安心です。

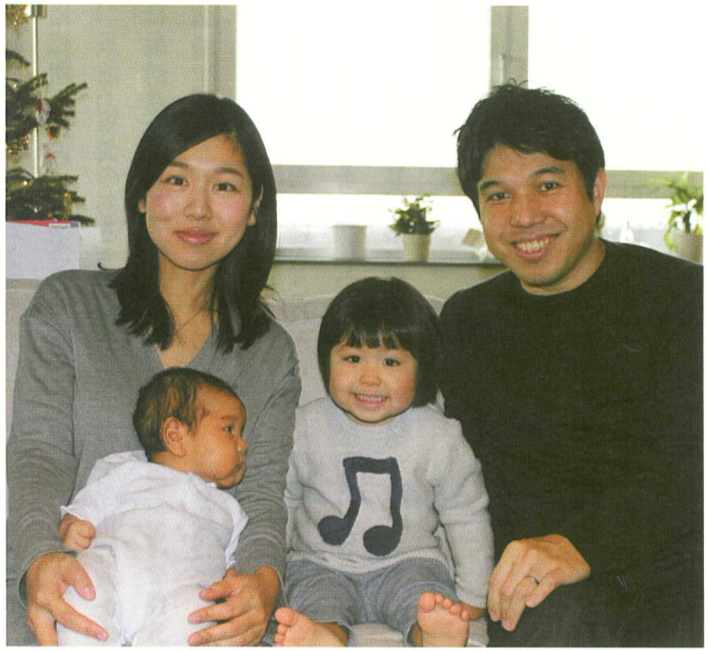
以前は、クリスチャンホームに生まれたことに違和感を覚えることもありましたが、今は、主が用意してくださっていた大きな祝福であったと感じています。救われた後も相変わらずダメな者であり、自分の罪の大きさに落胆することもたくさんあります。しかし、主はすでに二千年も前にこの罪の問題を解決してくださったこと、どのようなときにも主は近くにおられ、何が起きても主の導きは最善であると信じるとき、気持ちが楽になります。イエス様に出会えて本当に良かったです。

子どもたちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。それは、キリストが現われるとき、私たちが信頼を持ち、その来臨のときに、御前で恥じ入ることのないためです。（1ヨハネ　2・28）

野田　尚広（のだ　なおひろ）
一九七九年、三重県桑名市生まれ
カナダ、ノースバンクーバーウィンザー高卒
慶應義塾大学経済学部卒
キヤノン（株）勤務
妻・泉（いずみ）、長女・琴葉（ことは）、
長男・道都（みちと）

主は決して忘れず、見放さない

野田　泉



左が泉さん、ご家族といしょに

女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。（イザヤ　49・15）

私が自分の救いをはっきりと自覚できるようになったのは二十九歳の時、二〇一一年大晦日に御代田福音センターで洗礼を受けた夜です。受洗後シャワーを浴び終わったときに、それまでまとわりついていた「イエス様を信じることへの迷い」がすっきりと流れ去ったような気がしました。

それまでの数年間、吉祥寺集会や御代田のキャンプに参加し、主を頼って生きているつもりでいましたが、心のどこかで「信仰は自分の一部ですべてではない」、「主にすべて頼りきって生きるのは一般的な感覚を失いそうで怖い」という思いがありました。私は、主とこの世の両方に片足ずつを乗せてうまく生きようとする者でした。その迷いの気持ちは子どものころからありました。

私は父の転勤先であった香川県で、兄二人姉一人の下に生まれました。母は昔からクリスチャン、父は無神論者であり、両親の考え方は何に対しても正反対でした。二人の生き方の違いは家の中の空気をいつも左右していて、私にはとても面倒でした。母に連れられ家庭集会へ行き子ども心にイエス様のことは信じていましたが、集会で友だちが「イエス様大好き」と言うのを聞いてもその感覚がよくわからず、自分がひどく冷めているような気がしていました。

そのような中でも小学四年生のころ、初めて生きたイエス様の存在を感じた出来事がありました。クラスの女子生徒の中でいざこざが起こり、教室内は空気が重苦しく誰を信じていいかもわからず悩んでいました。初めて心から、この状況から助けてください、と祈りを捧げるようになってから、何かのきっかけでその状況が明るみに出て保護者や先生が知ることとなり、解決へと導かれました。その後すぐ父の転勤で引っ越しが決まり、一転笑顔で皆とさよならをすることができたのです。あれよあれよという間に解決へ導かれていったその出来事は、どう考えても偶然ではなく、祈りが聞かれたのだと子ども心に感じました。

求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。（マタイ　7・7〜8）

その後、吉祥寺集会へ集い始めました。一九九二年のことです。母と姉と共に集っていましたが、ある時、両親が激しく衝突する姿を見て、中学生になったばかりの私は、家の中がゴタゴタするのは母がクリスチャンだからではないかと思い、主や集会に反発心を覚えるよ

うになりました。家庭内にこんないざこざが起こるなら、結婚は主を知らない未信者としたい、主と無関係に生きたい、と思うようになっていきました。

中学、高校と、部活や友だちとの時間を理由に集会から足が遠のきました。窮屈なものから解放され、広い世界に出たような気がしていました。そして大学進学後はますます目の前にあるこの世の楽しみを追いかける毎日を送るようになりました。主と親に頼り従っていた子どものころの自分と、この世の価値観に流されるようになった自分にギャップを感じ、どこか虚しさも感じていましたが、大人になるとはこういうことだと都合よく解釈し、深刻に考えてはいませんでした。

人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ。（エレミヤ　17・5）

あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。からだのあかりは目です。それで、もしあなたの目が健全なら、あなたの全身が明るいが、もし、目が悪ければ、あなたの全身が暗いでしょう。それなら、もしあなたのうちの光が暗ければ、その暗さはどんなでしょう。（マタイ　6・21〜23）

その後、化学品専門商社に就職し貿易業務に就きました。仕事自体は楽しかったものの、社会人としての常識に戸惑い、人間関係に悩んだり、仕事の不出来に落ち込んだりの毎日でした。元々就職活動がうまくいかず、プライドの塊のようになっていた私は、自分には何の取り柄もなく無力だということに気付いているのに、それを見ないように虚勢を張り水面下でもがいていました。社会に出てから「あなたには何の能力がある？」と常に人に値踏みされているような気がしていたのです。

恋愛の悩みもあり、これ以上は落ち込めないほどの心境になりました。今思えばのちに救われるためにはとても感謝な状況でしたが、その時は未来がまったく見えなくなっていました。

ひとり、部屋でこれまで自分がしてきたことを思い返していたとき、突然自分の我（が）の強さやふてぶてしさが次々と情景となって浮かんできました。今まで受け入れてきてくれた家族や友だちに謝って回りたいような、何かに懺悔（ざんげ）したいような気持ちがこみ上げ、今まで自分は何か思い違いをしてきたのではないかと思わされました。そしてそのとき長年背を向けてきたイエス様のことが思い出され、長々と先延ばしにしてきた主との関係を突き付けられたような気がしました。

これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。（2コリント　5・18）

あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行ないの中にあったのですが、今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。（コロサイ　1・21〜22）

そこからまた日曜の礼拝に集い始めるようになりました。二十四歳でした。ただみことばや日々の歌を聴くだけでしたが、聖書にあまりに的確に自分の罪を言い表されてただ黙って涙するだけでした。やっとみことばが本当の意味で目に映るようになっていました。それでもまだ疑い深い私は、すぐにまた主を心

から信じようとは思えていませんでしたが、人の目、自分の目から解放されていいのだ、と気付かされて今までの間違った価値観を捨てたいと初めて思わされました。

わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。（イザヤ　43・4）

そのころ仕事では、会社の合併準備や業務トラブルで毎日遅くまで残業が続き、いつも頭の中が真っ白な状態でした。気付くといつも会社にいるようで、そんな息の詰まる日々から一時（いっとき）でも離れたいと、二〇〇七年ドイツ喜びの集いに参加しました。本当に温かいお交わりの場に久しぶりに心がゆるみ、不思議な平安がありました。主に期待してみようと思うようになりました。毎朝起きて一番に祈るようになり、そうして始まる一日に何が起こっても主からの安心感を感じるようになりました。

万軍の主は仰せられる。――わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。（マラキ　3・10）

主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。（詩篇　118・29）

その後徐々に仕事で張りつめていた日々が落ち着いてきたころ、ある日突然上司に別室に呼ばれました。会社の人員整理が始まることになり、今後のことを考えてほしいと伝えられました。リストラの勧告でした。突然のことに動揺し、自己憐憫（れんびん）の思いでいっぱいでした。思い描いていた人生とはかなり違ってきた、もうこれは自分の人生であって自分の

人生じゃない。もう完全に肩の力を抜こう、と思いました。

私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。（ヤコブ　1・2～3）

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。（箴言　3・5～6）

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。（詩篇　37・5）

ひたすら祈り転職活動を始めたとき、自信はまったくありませんでしたが、先行きに不安もまったくありませんでした。すべて主が決められると思うと、悩むことはありませんでした。

その後、電子接続機器メーカーに再就職し、忙しい怒涛の毎日がまた始まりました。残業続きで、朝昼夜、会社やエレベーターやトイレの中でも祈らなければやっていけませんでした。その職場では辞める人も多く目まぐるしく状況が変わりましたが、そこに就職したのは自分の意志や力でなく主からきたことですから、何が起こってもあまり動揺しませんでした。周りの方の力なしには何もできませんでしたが、仕事につまずく相変わらずの自分に落胆するたびにみことばに励まされました。

立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。（イザヤ　30・15）

10人の証し

Unser HERR lebt

わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。
（2コリント　12・9）

主を無視して生きていた時は、何か望まないことが起こると「選択を間違えたのでは」「努力が足りなかったのでは」、といつも過去と自分の内側に目を向けていました。しかしすべては主が起こされたことだとわかるようになってからは、主に委ねて期待する喜びと平安をいただけるようになりました。今思うと、子どものころに主に出会えていたことも感謝ですし、自分勝手に生きた日々も、反省は多いですが、ご計画のうちだったとわかります。

二〇一二年九月、野田尚広兄弟と御代田福音センターにて結婚式を挙げました。この結婚も主の憐れみでしかありません。私は二十八歳のころまで、結婚相手に何を求めたらいいのかよくわかりませんでした。子どものころ両親を見て感じていたことも影響していましたし、自分の信仰が中途半端だと感じて未信者の方と結婚する方が現実的だと感じていました。しかし、色々と段階を経て毎日祈らずには生活できなくなってから、やはり結婚生活に求めるものは信仰の一致だと思うようになりました。

具体的に結婚を祈りたいと思ったときに尚広兄が心に浮かびました。会話はおろか顔もほとんど見たことがありませんでしたが、母が数年前「野田尚広兄弟はいい人らしいよ」と言っていたのをその時に思い出したのです。「いつか友だちになれますように」と祈るようになりました。その直後、二〇一一年の御代田若者の集いのキャンプで、玄関に立つ尚広兄を初めて見ました。まわりに挨拶をしていた彼にどさくさまぎれに私も挨拶をしてみたところ、とても感じがよく「この人との結婚を祈ろう！」と決めました。そこからの主のご計画はあっという間でした。兄弟姉妹も交えて出かける機会を与えていただきました。そして、ベック兄にご相談したところ、結婚を前提にお付き合いを始めることになりました。あまりお互いのことを知らないままお付き合いは始まりましたが、三か月ほどで婚約、結婚に至りました。

結婚生活では、日々互いにわがままをぶつけ合う私たちです。主を見上げるとどちらが正しいかなどと争っているのが本当に恥ずかしくなるのですが、それでもすぐに忘れて自分の価値観のほうが正しいと主張し合う愚かな者たちです。

こういうわけですから、もしキリストにあって励ましがあり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。
（ピリピ　2・1〜2）

二〇一三年七月に長女琴葉（ことは）が与えられました。時に育児のことで神経質になって情報に振り回される私には、尚広兄が飄々（ひょうひょう）として何も心配しない様子が理解できないこともあります。しかしそれは主が兄弟を通して「何を心配しているのだ、私がいるのに」と語りかけてくださっているのだと気付かされます。

イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。
（マタイ　14・27）

二〇一五年一月より、尚広兄の赴任のためオランダのアムステルフェーンという街で生活しています。周りに日本人も多く、恵まれた環境をいただいています。私は育児に余裕をなくすこともありますが、異国での生活は家族がひとつにされる本当にいい機会とし

て与えられたと思います。

二〇一五年十一月に長男道都（みちと）が与えられました。オランダでの妊娠、出産を通しても不安を感じることなく主がすべて整えてくださいました。また感謝なことに、同時期に出産された日本人駐在者が周りにたくさん与えられました。臆病（おくびょう）で主をお伝えする器にはなかなかなれませんが、必要なときにはその機会が与えられますように、と祈る日々です。また、まだ救われていない私の父や兄姉たち、その家族、そしてまだ小さい娘と息子が主と出会い、早く人生を明け渡すことができるよう引き続き主に期待しつつ祈っています。

目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮んだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。（1コリント　2・9）

野田泉
一九八二年生まれ。私立富士見高校卒、立教大学文学部英米文学科卒。
夫・尚広（なおひろ）、長女・琴葉（ことは）、長男・道都（みちと）
二〇一五年一月よりオランダ、アムステルフェーン在住

家族を一つにしてくださった

重枝　宏英



妻の由紀子さんと

ヨーロッパに押し寄せるシリヤの難民の悲惨な姿を見ていると七十年前の自分が重なってきて複雑な思いがします。私は一九四二年に山口県で生まれ、終戦まで家族五人で満州の新京（現在の長春）で暮らしました。終戦の時は三歳で、ソ連軍の占領で大混乱する中を命からがら故郷の山口県に引き揚げました。今思えば主の憐み以外の何物でもなかったのですが、テレビで放送された「大地の子」は決して他人ごとではありません。主人公のように中国残留孤児になるか、私と死の間には、ただ一歩の隔たりしかなかったのです。

人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。（箴言　14・12）

子供のころ、世間の価値観には「末は博士か大臣か」の名残（なごり）があり、立身出世して金持ちになる人が成功者でした。わたしはわがままで親の言うこと

を聞かず、いささか背伸びした少年でした。中学校の作文では、「上空を飛び回る自衛隊の練習機の騒音がうるさくて古い木造校舎では授業にならない。一機が何億円もする高いジェット戦闘機の購入を止めれば立派な校舎が建つのに」と書きました。高校を卒業して東京の大学に進学しました。三年生からの二年間は吉祥寺の学生寮でお世話になりましたが、キリスト集会との接点はまったくありませんでした。漠然（ばくぜん）と描いていた夢を具体化する努力も不十分なまま、激化する大学紛争の最中に卒業しました。

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。（箴言　19・21）

わたしは報道カメラマンとして四十年ほど働きましたが、東京を振り出しに全国十一か所の放送局を転勤して回りました。三年目の金沢時代に同郷の家内と結婚して三人の子供に恵まれました。世の中の出来事を自分なりに切り取って伝える仕事は、どんなに忙しくても若い頃には充実した毎日でした。広島では「市民が描いた原爆の絵」、二度目の東京では「成田空港開港」、熊本では「阿蘇山鳴動」などのドキュメンタリーが思い出として残っています。しかし昼も夜もない取材生活に次第に疲れを覚えるようになり、五十歳を前にして将来に対する漠然とした不安や思い煩（わずら）いに悩まされるようになりました。出口のない暗いトンネルに迷い込む恐ろしい夢をみて寝汗をかいたこともありました。

家内に勧められて渋々読み始めた聖書ですが、モーセやダビデが登場する歴史が面白く、夜がふけるのを忘れるほどでした。難解な部分は飛ばしながら興味のある箇所だけ拾い読みしていましたが、三千年も前に書かれた伝道者の書に残されたソロモン王の次の言葉は、新しがり屋の私を支えていたちっぽけな誇りを打ち砕くのに十分でした。

「これを見よ。これは新しい。」と言われるものがあっても、それは、私たちよりはるか先の時代に、すでにあったものだ。（伝道者　1・10）

イエス様に出会う前の自分は、福音書にある放蕩息子のように、すべてを失いかけていましたが、外面だけは繕（つくろ）って強がっていました。ただひたすら孤独な魂を奮い立たせながら、自分を義とし、自分が正しいと思うことだけを行っていました。自己実現の道は限りなき迷いの道でした。

それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。（ルカ　15・13〜14）

イエス様の救いは、人生の目標、価値観のすべてを変えてしまうほど力強いものです。そのためにイエス様は、私が大事に思っているものを筍（たけのこ）の皮をむくようにはぎ取られました。私が、自分の力では乗り越えることができない問題なしには決して回心しないことを、主はご存じだったからでしょう。

まず神戸の大学生だった長男に心の病が与えられました。そのころ私は大阪に転勤になり、各部をまわって着任の挨拶をすませてホテルに戻ると長男が転勤祝に訪ねてきてくれました。痩せた息子を見て驚いた私は、元気づけるために鶴橋まで連れて行って焼肉をつつきながら「頑張れ！」と叱咤（しった）激励する始末でした。長男の問題を自分の問題として受け取ることができない私は、仕事にかこつけてすべてを家内に押し付けていました。

10人の証し

Unser HERR lebt

罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。

（ローマ　6・20〜21）

家族ぐるみで交遊があった集会の姉妹の長い祈りの結果として、まず家内が導かれました。集会から帰ってくる家内の顔はいつも輝いていました。問題を抱えながらどうして喜ぶことができるのか不思議でした。家内からは、私も集会に行くようにと何度も勧められましたが、自分のような者が行くところではないと尻込みをしていました。

そのうちに大分に転勤になりました。転勤の内示は東京でしたが、現場復帰の希望が聞き届けられ、大分に差し替えになりました。このことが人生の転機になろうとは思いもよりませんでしたし、これが神のご計画だったこともその時は分かりませんでした。しかし、このことによって、かつてあれほど頑（かたく）なに集会を拒否していたにもかかわらず、いつのまにか集会に出るのが喜びに変わったのです。

立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。

（ルカ　15・18）

大分に赴任して半年後の一九九三年の正月に、家内が御代田で受洗することになりました。私も、家内の洗礼に立ち会うために御代田へ行きました。そこは、それまで経験したことがないような別世界でした。ある方の別荘でお会いした兄姉との交わりは心が休まるひと時でした。当時の私は不信仰な者であったのですが、「仲間として歓迎されている！」と感じました。受洗する気持ちはそれまでまったくなかったのですが、その夜は二段ベッドで一睡もできず悶々（もんもん）と過ごしました。私は、長男としての立場とか社会的な差し障（さわ）りばかりを言い訳に逃げてきましたが、主に救いを求めて受洗する家内に申しわけないという人間的な気持ちもありました。夜明けの空を眺めながら、「これに賭けてみよう」、「夫婦は苦楽を共にするものだから、一緒に洗礼を受けよう」、と決心したとたんに心が軽くなるのを覚えました。寝不足のために意識がもうろうとする中で、それまでの自分の思いとは逆の方向に物事が進んでゆく不思議な体験でした。私達夫婦と二男、共に受洗に与りました。洗礼の時にいただいた聖句は我が家に最も必要なものでした。

主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなしい。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなしい。あなたがたが早く起きるのも、おそく休むのも、辛苦の糧を食べるのも、それはむなしい。主はその愛する者には、眠っている間に、このように備えてくださる。

（詩篇　127・1〜2）

素直に「ごめんなさい」が言えない私でしたが、十字架のイエス様は、隠されていた私の罪を光の中に出されました。心に罪を抱（かか）えたままでいることが次第に辛（つら）くなり、ある聖日に大分集会の兄姉の前で罪を告白しました。

私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。

（詩篇　32・5）

ダビデはナタンに言った。「私は主に対して罪を犯した。」ナタンはダビデに言った。「主もまた、あなたの罪

を見過ごしてくださった。あなたは死なない。」
（2サムエル　12・13）

その後、大分の三人の兄弟がそろって我が家を訪ねてこられました。彼らはまず私たちのために祈ってくださった後、「私たちも罪人です」と一人ひとりが、自分の数々の罪を正直に証（あかし）してくださいました。私たちと共に歩もうとしてくださっている兄弟たちの純粋さと温かさが伝わってきて、この集会にはイエス様を信じる信仰があると感じました。それは単なるヒューマニズムから出たものではなく、イエス様が十字架で示された自己犠牲の愛の現れ以外の何物でもありませんでした。

イエスは言われた。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」
（ヨハネ　8・11）

彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。
（ルカ　15・20）

自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。（マタイ　10・38）

私と家族は多くの問題とともに、数えきれないほど多くの恵みもいただきました。十字架の赦しと主の大いなる愛を体験してイエス・キリストに従う信仰に導かれたのです。長男は熊本集会に兄弟の初穂として導かれ、主にある結婚に導かれた二男夫婦は吉祥寺集会に、長女と私達夫婦は福岡集会に集わせていただいています。

家内の母の加藤廉子（かとうやすこ）姉妹は、孫と一緒に四十キロほど離れた熊本市内の集会に、八年

間通い続けているうちにイエス様を受け入れるようになりました。阿蘇の美しい大自然に囲まれて暮らしているうちに、背後におられるすべてを造られた唯一の神の存在を信じるようになったそうです。「南無阿弥陀仏」を唱えていた人が「愛するイエス様！」と祈るように変えられました。集会は何を祈っても自由なので嬉しいと母はいつも話しています。

地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。（イザヤ　45・22）

初めに、神が天と地を創造した。（創世記　1・1）

「救いの民は一つに群れ、一つの心　一つの御名　一つの霊　一つの祈り　一つの歌」（日々の歌212番）とあるように、キリスト集会はイエス様を中心に全国の兄弟姉妹が一つに組み上げられた霊的な有機体ですから、家族がたとえ地理的には離れていても、イエス様にあって一つであるからいつも安心です。

苦しみのうちから、私は主を呼び求めた。主は、私に答えて、私を広い所に置かれた。主は私の味方。私は恐れない。人は、私に何ができよう。（詩篇　118・5〜6）

多くの問題を抱えたまま崖から飛び降りるような気持ちで受洗してから多くの年月が過ぎました。イエス様は確かに期待を裏切らない方でした。「あなた様の恵みは十分です」。最近は心の中からそう言えるようになりました。

当然のことながら人は自分を救うことはできません。救いは主のものだからです。私たちは自らが光ることはできませんがイエス様の光の中に意識してとどまることはできます。

10人の証し

Unser HERR lebt

苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります。（詩篇　119・67）

（病者の祈り）
大事を成そうとして力を与えてほしいと神に求めたのに、慎み深く従順であるようにと弱さを授かった。
より偉大なことができるように健康を求めたのに、よりよきことができるようにと病弱を与えられた。
幸せになろうとして富を求めたのに、賢明であるようにと貧困を授かった。
世の人の賞賛を得ようとして権力を求めたのに、神の前にひざまずくようにと弱さを授かった。
人生を享楽しようとあらゆるものを求めたのに、あらゆることを喜べるようにと生命を授かった。
求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞き届けられた。
神の意にそわぬ者であるにもかかわらず、心の中の言い表せない祈りはすべてかなえられた。
私はあらゆる人の中で最も豊かに祝福されたのだ。
（ニューヨーク・リハビリテーション研究所の壁に書かれた一患者の詩）

重枝宏英（しげえだ　ひろひで）
一九四二年山口県防府市生まれ
防府高校卒　早稲田大学第一政経学部卒
妻・由紀子　長男・学　二男夫婦・豊、恵
長女・陽子

私にとっては神の近くにいることが幸せなのです

重枝　由紀子



手前左が由紀子さん、ご家族そろって

彼に信頼する者は、失望させられることがない。（ローマ　10・11）

一九九二年一月、重い足を引きずるようにして当時神戸集会が行われていた岡本の公民館にたどり着きました。片隅に座って目を上げると、このみことばが飛び込んできました。「失望させられない方がいらっしゃるの？『彼』って誰？」、その方を知りたくて毎週通いました。

聖歌を賛美すると何故か涙があふれました。語られるみことばが渇（かわ）ききった心にしみ込んできました。「彼」がイエス様なら信じたいと思いました。何も分かりませんでしたが「イエス様」と声をかけて祈るようになりました。暗く沈んでいた心の中に少しずつ光が差し込んできました。空も山も木々も草花も以前と違って明るい光に包まれて見えるようになりました。見えない方を信じようと思った時から…。

私は、山口県防府市に兄と弟がいる五人家族の中で育ちました。父は真面目で優しい人でしたが、自分の部屋で勉強ばかりしているマイペースな人でした。けれども時々、職場の天体望遠鏡を借りてきて宇宙の星を見せてくれたり、自分で電蓄を改造してレコード音楽を聞かせてくれました。いつも明るくて器用で働き者の母のお蔭で、裕福ではありませんでしたが、のんびりと幼少時代を過ごしました。

高校を卒業して、東京に憧れていた私は、少人数教育で教師と学生がマンツーマンで語り合える学園があると兄に勧められて、担任の反対を押し切って、推薦で入学しました。入学した短大は、私の描いたものとはかけ離れていました。楽な道を選んだことを後悔し、初めての挫折（ざせつ）を味わいました。しかしこの時、初めて聖書を手にしました。寮では毎晩夕拝があり、ホームシックにかかっていた私は、賛美歌が流れる静かな空間に癒（いや）されました。食堂のテーブルには野の花が飾られ、自分も将来家庭を持ったらいつも食卓にお花を飾ろうと夢見ましたが、信仰を求めることはありませんでした。

二年目に寮を出て兄のアパートに居候（いそうろう）しました。兄は法律事務所で働きながら国家試験の勉強中でした。私は学校からまっすぐ帰り、食事の支度をして兄を助けました。近くに住んでいた兄の友人で、同じ郷里の主人と出会いました。お互いに惹（ひ）かれるようになって、二年後に結婚し、主人の赴任地の金沢市で新婚生活が始まりました。男の子が年子で与えられ、見知らぬ地で育児に追われました。主人はテレビ局の放送部に勤務していましたので、時間も不規則で出張も多かったのですが、忙しい時間を縫（ぬ）って家族を連れて海や山へ出かけ、いろんなことを教えてくれたり、子供たちと遊んでくれました。四～五年ごとの転勤の中での東京時代、子供のＰＴＡを通して知り合った方と家族ぐるみの交際が始まりました。ある時からこの友人は、悩みを通して聖書に出会い吉祥寺集会に集うようになりました。信仰に反対だったご主人と私たち夫婦の三人は、家族の平和のために信仰を捨てるよう彼女を説得しようとしたことがあります。信じられないような話ですが、その四人全員とその家族の十人全員がそれから十年、二十年後にイエス様を信じる者とされたのです。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

東京を離れる一年前、主人は海外出張で中東に行きました。当時は赤軍やテルアビブ空港事件などで緊張した取材の中で眠れない夜を過ごし、食事も合わず、一過性のノイローゼになって帰国しました。成田空港に迎えに行った帰りの車中で、別人のように弱くなった主人を見ました。いつも強い主人に頼っていた私は、何かが音を立てて崩れていくような不安に駆られました。

そんな時、友人について吉祥寺集会に行ってみました。ベック兄から「由紀子は神様を信じますか？」と聞かれて黙っていると、「神様に背を向けているのが一番の罪だよ」と言われました。罪という言葉がピンとこない私は「子供のころから母に日々感謝するように育てられたので、いつも感謝しています」と言ったように覚えています。「誰に感謝しているの？」と聞かれて言葉につまりました。感謝をする対象を知らなかったのです。

一週間ほど休養したら主人は元気になって職場に復帰し、その後も四国、九州と転勤を繰り返し、以前にもましてバリバリ仕事をしていました。子供たちは度々（たびたび）の転校で辛い思いをしたと思いますが、そのつど、新しい環境にも順応し、友達も多く、

10人の証し

Unser HERR lebt

勉強、スポーツ、音楽、と伸び伸びと学校生活を送っていたように見えました。念願の娘も誕生して順風満帆の道を歩んでいました。もしこの幸せがあの時のように突然崩れたら‥と不安になると、友人が言っていた「いつまでも変わらないものがあるのよ」という言葉が時折頭をかすめました。送られてきた『光よあれ』の本は隅々まで読みました。ここには何か真実なものがありそうだと思いつつも、当時の私の目には限られた狭い世界のように見えました。今の自由を奪われたくないとも思いました。それに加えて、家の格式を大事にする義母がクリスチャンになることを許してくれるはずがない、という思いもありました。

一九九〇年にベック兄が熊本に来られました。東京でお会いしてから八年ぶりでした。ベック兄は覚えていてくださり「会えてよかったー」と握手をしてくださいました。私は、友人への義理という気持ちで参加していたため、恥ずかしくなってソーッと抜けて帰りました。そのころ、新しい魂のために、との祈りの内に私も加えていただいていたことを後で聞いて驚き、主を恐れました。二か月後、大阪に転勤になりました。神戸の大学に通っている長男と再会できると喜んで出かけました。しかし、志望校に合格して期待に胸をふくらませて我が家を巣立っていったはずの息子は疲れ果てて、心が苦しんでいました

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。

（1ペテロ　4・12〜13）

私は、幸せの形を心に描いていました。しかしそれは、周囲からは幸せに見えるうわべだけのものでした。幸せの土台が何であるか分かっていませんでした。

そんなものは長男の問題を通してもろくも崩れ去りました。心の中ではもがき苦しみながらも自分の力でいろいろなことを試みましたが、すべて失望しました。とうとうある日「神様、助けてください」と叫びました。主は、私の心からの叫びにすぐに答えてくださいました。

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。

（詩篇　50・15）

心に浮かんだのは、試練の中でも輝いている友人の笑顔でした。すぐに電話をかけて、集会を教えてと尋ねました。電話の向こうの友人は「この日を待っていたのよ。うれしーい」と涙声で喜んでくれました。なぜ嬉しいのと思いましたが、肩の力が抜けて楽になったことを覚えています。実にこの友人は私と私の家族のために十一年間祈り続けてくださっていたのです。

神戸集会に集い始めて何か月か経ったある日、突然自分の罪に気づかされました。自分の描いた幸せのために主人や子供たちを支配していたこと！　目に見えるものを追いかけ、人の評価を気にして人を恐れ、人を信用してしまう自分！と次々と罪が明らかになり、「ごめんなさい、ごめんなさい！」とイエス様に謝りました。涙が止まりませんでした。大学受験期の長男の枕元に聖書が置いてあったことも、歴史の好きな息子が興味で読んでいるとばかり思っていました。私は、息子が求めているものが何であるかに気が付きませんでした。

神はある方法で語られ、また、ほかの方法で語られるが、人はそれに気づかない。

（ヨブ　33・14）

10 人の証し

Unser HERR lebt

救われて半年もしないうちに、大分に転勤になりました。不安定な長男を一人で残していくのは後ろ髪をひかれる思いでしたが、このみことばをいただいて出発しました。

主は荒野で、獣のほえる荒地で彼を見つけ、これをいだき、世話をして、ご自分のひとみのように、これを守られた。（申命記　32・10）

東京の大学に通っていた二男は、初めて行った御代田の福音センターで、「ここには純粋な何かがある」と感動していました。その後、ロスアンゼルスのキャンプから帰って間もないころ電話で、「イエス・キリストを信じたよ。帰ってお父さんに伝える」と言ってきました。夏休みになって、喜んで帰ってきた息子と礼拝に集いました。

当時の別府集会は三十歳代の若い兄姉が大半でした。ある兄姉のお宅で毎週礼拝が持たれていました。私は試練の中にも喜んで集会に集っていましたが、主を知らない主人は、大事な息子のことを心配しながら仕事に追われていました。早く主人が救われて共に祈れるようになりたいと主人の救いを毎日祈っていました。そんな主人でしたが「もし息子の病が癒されるなら」という願いから時々集会に来るようになりました。ある時から夜中に枕元で聖書を読んでいる主人の姿がありました。ある日、みことばと集会に生きておられる聖霊に導かれて、主人は家族と兄弟姉妹の前で隠していた罪を光の中に出し悔い改めました。この時いただいた主にある兄弟姉妹の愛を忘れることができません。

造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。（ヘブル　4・13）

けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。明らかにされたものはみな、光だからです。（エペソ　5・13〜14）

喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。（ローマ　12・15）

主はこう仰せられる。「あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ。」（エレミヤ　31・16）

すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。（ローマ　11・36）

わたしは再びあなたを建て直し、あなたは建て直される。（エレミヤ　31・4）

イエス様と出会う十年前に主は、阿蘇に山荘を備えてくださっていましたが、長男は神戸大震災から三年後に阿蘇に帰ってきて、リハビリのために私の母と生活を始めました。父の亡き後一人暮らしをしていた母が、孫の手助けをしたいと言ってくれたのです。こうして長男と母の生活が始まり、その一年後に母は救われました。家族が次々と受洗して最後に残された娘も二〇〇〇年、二十歳の誕生日に受洗の恵みに与りました。

弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。（ヨハネ　9・2〜3）

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。
（ヘブル　12・11）

主は、私が握りしめていたものを一つひとつ取り上げてくださいました。その時は耐えがたく痛みましたが、まるで重い十二単の着物を一枚一枚脱ぐように、心が軽くなるのが分かりました。

一九九七年に主人の父が吐血して病院に運ばれました。胃がんの末期でした。口下手で頑固な父でしたが、私がクリスチャンになったことで叱られたことは一度もありませんでした。病院で、主人と三人だけのわずかな時間が与えられた時のことです。枕元で聖歌を歌っていると「賛美歌はえーの」と表情が和らぎました。主人が祈ると、寡黙な父が突然「わしはもう遅かろうかー」と話し始めたのです。戦時中に満州の国境守備隊で高射砲の部隊長をしていた時、ソ連軍との戦いの中で、自分の命令によって若い兵隊を死なせてしまったというのです。それまで封印していた辛い過去を打ち明けてくれました。父はほどなく自宅に帰り半年後に召されましたが、怒ってばかりだった父は人が変わったように優しくなったそうです。父の変り様に母は「よほど良い人の血を輸血してもらったのかしら」と不思議がっていました。召される前日には「今までお前にばかり当たって悪かった」と謝られたそうです。棺の中の穏やかな表情を見て父がイエス様のところに行けたことを主人と共に喜びました。

主人の母は、私たちが父の葬儀で焼香をしなかったことを嘆き怒りました。何年間の試みの後、妥協しない主人を見限った母は主人の弟に家督を継がせました。親族からも責められました。一旦は故郷から足が遠のきかけた主人でしたが、次のみことばが足を引き留めました。

もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。
（1テモテ　5・8）

母は、二〇〇一年の福岡メサイアコンサートに感動し、その年に行われた二男の結婚式に出席して喜んでくれました。そのころから私たちの信仰を認めてくれるようになりました。

十年ほど前から少しずつ認知症が始まり、遠距離介護に月に一回のペースで行くようになり、母との交わりが増えました。話し好きの母の話を夜遅くまでたくさん聞きましたが、私も少しずつイエス様の話をすることができました。

その後入院しましたが、近くの山口集会の兄姉が頻繁にお見舞いに行ってくださいました。二〇一三年のクリスマスには病院コンサートが与えられました。九州各地や広島から兄弟姉妹が集まってくださり、地元の山口からも大勢の方が賛美の輪に加わってくださいました。お年寄りとスタッフ八十人以上の方々に、ご降誕の賛美とメッセージをお届けすることができたのは主の恵みでした。車いすの母は身を乗り出すようにして拍手していました。

ある日お見舞いに行って帰ろうとした時のことでした。突然お腹を押さえて「私は往生できない。できない」と嘆きました。イエス様の十字架のおかげで罪が赦されていることを話して祈ると、はじめて「アーメン」と声を出して言ったのです。二〇一五年一月、「日々の歌221番」を賛美する中、母は静かに息を引き取りました。母が残した多くの短歌の中にこんな歌を見つけました。「人の世は重き荷物を背負いつつ我何処にぞ荷物下（おろ）さん」。義母に声をかけてくださりご自身の許に休ませてくださったイエス様の御名

10人の証し

Unser HERR lebt

をほめたたえます。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。（マタイ　11・28）

十数年前から主人と共に賛美の群れに加えていただきました。日々の歌の歌詞はほとんどがみことばで、歌っていると力が湧いてきて心の奥底から喜びがあふれてきます。

詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、主に向かって、心から歌い、また賛美しなさい。（エペソ　5・19）

長い間本当の幸せを求めてきた私は、今はっきりと言うことができます。

主がくださる幸せは、川岸に植わった木のように、時が来たら豊かな実を付け、その葉はいつまでも緑に茂りゆくことを…

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。（詩篇　119・71）

しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。私は、神なる主を私の避け所とし、あなたのすべてのみわざを語り告げましょう。（詩篇　73・28）

重枝由紀子（しげえだゆきこ）
一九四七年山口県防府市生まれ
防府高校卒業　桜美林短大英文科卒業
夫・重枝宏英　母・加藤廉子

主と共に歩む決心

渡邉　航



左が航さん、お母さま、お父さまと

主の御名を心から賛美いたします。

私は、一九八八年にドイツのハンブルグという港町で生まれました。父が商社に勤めていたために、幼少のころからドイツと日本を行ったり来たりする生活をしてきました。私が十歳のころ、母が吉祥寺集会で救われ洗礼を受けました。今考えると、私のイエス様との出会いもそのころだったと思いますが、あまりよく覚えていません。当時は、疑うこともなくイエス様を信じていました。今回の証しは、そんな子供の信じる気持ちが、イエス様を救い主と確信する大人の信仰へと変えられた歩みについて書きたいと思います。

小さいころからサッカーが大好きだった私は、サッカー選手になることが夢でした。十五歳の時、父の仕事の都合で再度ドイツに移住することになり、サッカー大国でプレーできることが幸せで、本格的にプロの道を志しました。十八歳になるころ、ドイツのプ

ロチームの下部組織に入団することができました。強豪チームに入団することを志し、それまで何度もセレクションで落とされてきた私にとってはようやくつかんだチャンスでした。

ユースチームでは実力主義の生存競争の中に身を投じました。活躍すればそのままトップのプロのチームに昇格できますが、活躍できなければ夢を諦めることになります。チームから昇格できる選手は多くても二人か二人で、チームメイトたちは仲間というより、全員がプロを目指すライバルでした。二〇〇六年の夏のことです。

昼は高校に通い、夜はチームの練習に励む生活が始まりました。しかし、シーズン開幕当初に怪我をしたこともあって、ユース最後の大事なシーズンで完全に出遅れてしまいました。試合に出場する機会もなく、ただただ時間だけが過ぎていくことに焦りを感じていました。シーズンの前半戦が終了した頃、試合にもほとんど出ていなかった私に、知り合いのトレーナーから声をかけられました。「プロになりたいならこの半年間が最後のチャンスだ。学校を休学して一緒に練習してプロを目指さないか」

私は両親に、「ユースとしてプレーするこの最後の半年間が最後のチャンスだから、ぜひサッカーに専念させてほしい。もし、半年後にサッカー選手になれなかったら、諦めてまた学校に戻る」と泣きながらお願いしました。両親は私の挑戦に協力してくれました。今でも、あの時後押ししてくれた両親にはとても感謝しています。

二〇〇七年の一月から学校を休学し、午前中はトレーナーと、夜は所属するチームで練習するサッカーざんまいの毎日になりました。私は体も一回り大きくなり、確かに上達していきました。そして、その年の六月にいくつかの日本のJリーグのチームでプロテストを受けました。

しかし、ここから苦難の道がスタートします。

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

（詩篇　119・71）

テストを受けたチームからは一定の評価を得たのですが、プロ契約に関しては「夏のこの時期はシーズンのまっただなかだし、今は入団させられない。冬には新シーズンに向けて選手の入れ替えがあるので、その時に再度来れば、考え直す」という回答でした。実力とは別の理由（単にタイミングの問題）で入団できないことに納得ができず、どうしても諦め切れませんでした。プロになるチャンスがすぐそこまで来ていると実感しました。こんなチャンスは二度とめぐってこない。もう一度プロに挑戦したい、という気持ちになりました。

10人の証し

Unser HERR lebt

私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

（ローマ　8・24〜25）

私は、その時には気付きませんでしたが、自分の信じる道が正しい道だ、と決めつけていました。主が違う道を示そうとしてくださっているという感覚はまったくなく、ただ自分の肉の思いにしがみ付いていました。主は、自分の信じる道を選ぶのか、それとも自我を捨てて、主の道に従うのかを私に問うていたのだと思います。

ですから、兄弟たち。私たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊に

よって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。（ローマ　8・12〜13）

しかし現実には、二か月の日本滞在を終えてドイツに戻った私は、両親と交わした約束と自分自身の諦められない気持ちの狭間（はざま）にいました。両親には「もう少しだけサッカーを続けさせてほしい」とお願いしましたが、反対されました。特に母には大反対され、「約束が違う。あなたの決断には平安が持てない」と言われました。当時のことを母は、主から「盲人に盲人の手引きはできない」というみことばが与えられていて、私がしていることが主から来ていないことがはっきりと分かっていたようです。

両親の言うことは正しいし、親のサポートなしではサッカーはできないので、ひとまず学校に通い始めました。ただ、どうしても諦めきれない私は、サッカーも続けたくて、次第に学校をサボり、練習に明け暮れるようになりました。朝、家を出る時は学校に行く振りをし、実際は練習場へ向かい、トレーニングをしていました。それでも、両親に対する後ろめたい気持ちはありましたから、そういう時はいくら練習をしても上達しませんでした。どんどん時間が過ぎていき、コーチに支払うお金もなくなり、ただただ焦（あせ）っていました。

私は、イエス様を信じていました。しかし、自分の望む道と一致しなければ、イエス様が与えてくださる主の道を歩こうとは思っていませんでした。イエス様を信じているようで、実際はただの神頼みでした。何か困ったり、どうしようもなくなった時に助けてくれる、都合のよい神様としてイエス様を見ていました。信仰は主とともに歩むことであるということが、その時の私には理解できませんでした。

もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。（1コリント　15・19）

焦りの中で、どれだけサッカー選手になりたいかが両親に十分に伝わっていないのでは、と思うようになりました。そして、これほどまでにサッカー選手になりたいということをアピールさえすれば、プロを志すことをサポートしてくれるはずだと思い込んでいました。今、思えばとんでもない勘違いです。両親を納得させるため、ありとあらゆることをしました。家出をし、借金をし、とんでもない方向へ向かっていることにさえ気付かず、ただ自分がしていることが正しいと信じきっていました。盲目でした。

そんなことを三か月ほど続けました。そして、家族との関係はボロボロで、両親を困らせ、母は泣き、父は途方にくれていることに気付きました。サッカー選手になりたい気持ちは変わりませんでしたが、いくらやっても上達しないし、お金と時間だけがなくなっていくのです。こんなことをいくら続けてもサッカー選手にはなれないことに初めて気付きました。

そして、私は「イエス様。助けてください。私の家族は私のせいでボロボロです。母は泣いています。父は途方にくれています。耐えられません。でも、サッカー選手という夢も捨てきれません。どうしても諦められません。だから、イエス様。私に、答えをください。私がはっきりと分かるような答えをください。私が分かるような答えが出るまで、私はサッカーボールに一切触れません。もし、答えがなければサッカーはできないから、それが答えです」と祈りました。かなり強引でしたし、本来、祈りはこうあるべきではないのでしょうが、それが追い込まれた私の正直な祈りでした。

ひたすら答えを求めて祈りました。そして二週間後、主からとしか思えない答えがあり、トレーナーか

ら離れ、学校を卒業するという道が示されました。答えの出た瞬間、私は頭で理解したというよりは心の中の御霊が反応し、パッと道が開けるような感覚でした。あれほどサッカーに執着していた私が、何故、あの時示された道に素直に従うことができたのか、今、振り返ってみると不思議です。ただ、示された結果についてというよりも、祈りが聞かれ、主が答えを示してくださったという事実に感動したことをよく覚えています。このことを通し、心から祈って主に求める時、主は必ず答えてくださるということを身をもって体験しました。もう一生イエス様から離れたくない、イエス様が示してくださる御心の道を主と共に歩む、と決心しました。

そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならないのですが、信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

（1ペテロ　1・6〜7）

今思い返すと、あそこまで追い込まれなければ自分を捨てることができなかったのです。そういうおろかな罪人です。主は私に気付かせるために、この試練を与えてくださいました。そして今、時間が経ってもあのつらい時に、主が祈りに答えてくださったという経験が私の信仰に確信を与えています。そのことが主から来ている、主からのかけがえのない教訓であることを感謝しています。

あなたを恐れる人々は、私を見て喜ぶでしょう。私が、あなたのことばを待ち望んでいるからです。主よ。私は、あなたのさばきの正しいことと、あなたが真実をもって私を悩まされたこととを知っています。

（詩篇　119・74〜75）

自分が進もうと願う道と主が与えようとしてくださる道が異なる時、自分が正しいと思うことにはそれなりに根拠があります。さらに、肉の思いによって事実を捻じ曲げたり、都合の良いように解釈したりして、自分の道が主の道と同じであると考える習性が私にはあります。油断していると「自分の思い＝主の道」と勝手に安心し、その安堵（あんど）の心から、主の平安とはかけ離れた道へ進んでしまう危険性が常にあることを覚えさせられます。主には主のご計画があり、長い目で見れば私たちにとって一番ふさわしい祝福の道が備えられているのですが、そのことを頭で分かっていたとしても短期的な視点で物事を見てしまい、主を疑い試みるおろかな性質を持ち合せていることを改めて覚えます。

それればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。（ローマ　5・3〜5）

肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。

（ローマ　8・6）

結局、私はプロサッカー選手にはなれませんでした。しかし、主は私に新たな道を備えてくださり、大学を卒業し、職を与えてくださいました。どんな時も自分の肉の想いは存在しますが、そのことよりも主の御心こそが特別な平安を与えてくださるものだと確信します。

主を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。来なさい。子たちよ。私に聞きなさい。主を恐れることを教えよう。いのちを喜びとし、しあわせを見ようと、日数の多いのを愛する人は、だれか。あなたの舌に悪口を言わせず、くちびるに欺きを語らせるな。悪を離れ、善を行なえ。平和を求め、それを追い求めよ。

（詩篇　34・9～14）

渡邉　航（わたなべ　こう）
一九八八年・ドイツ・ハンブルグ出身。ドイツ・デュッセルドルフ在住。
監査法人勤務

イエス様、ありがとうございます

清水　洋一



妻の總子さんと

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（1コリント　10・13）

このみことばは、交通事故を起こした時に大きな励ましとなった忘れられない聖句です。事故は一九九七年六月十三日朝、高速道路のサービスエリアで起きました。喜びの集いに参加するため、車で御代田に向かっていた時でした。ブレーキとアクセルのペダルを踏（ふ）み間違え、駐車中の七台の車に次々にぶつかり、最後にトラックの後部に激突して停まった大事故でした。トラックの荷台の角が、運転席の私と、助手席の妻の間に突き刺さっていました。少しでも横にずれていたら、家内か私のどちらかが即死していた、

と言われました。奇跡的に私は無傷でしたが、家内はまったく動けなくなっていました。

私は近くの人の手を借りて家内を車から引きずり出し、地面に寝かせました。また保険会社に連絡して七台の車の所有者への補償のことを話し、それから救急車に同乗して病院に行きました。そして、病院での手続きを済(す)ませて再び事故現場に戻り。車の廃棄処分、積荷の自宅への輸送などを済ませて再び病院へ行き、その夜は集中治療室で過ごしました。翌日まで持つかどうか分からない、と医師から告げられたからです。幸い、一命は取り留められましたが、それからも大変でした。

事故を起こしたのは広島県の福山で、自宅は北九州でしたから、ウイークデーは大学勤務、週末は新幹線と在来線、タクシーを乗り継いでの病院通い、その他に認知症で施設に入っていた家内の母親を特別養護老人ホームへ移す問題もかかえていました。加えて七件の事故の補償問題、さらに事故が大きかったので、警察のほか検察庁の取り調べも受けました。そして、これらの問題すべてを一人で処理するのは無理だ、自分にはできそうもない、と思った時、初めの第一コリントのみことばがストンと胸の中に入って来て、「耐えられない試練はないんだ」という確信が与えられたのです。そして、それからは何の思い煩(わずら)いもなく、すべての問題に対処することができました。その時、私はイエスさまに出会って二年足らずでしたが、信仰をいただいていて本当に良かった、信仰がなかったらお手上げになっていたのではないか、と思いました。

家内の入院は四か月に及びました。救急車で運ばれた病院に二か月、そこでは応急処置と、頸椎(けいつい)を伸ばす牽引(けんいん)治療をしてくださったのですが、完治するには手術しかない、ということで、脊椎損傷専門の病院に転院しました。そして、うまくいくかどうかはフィフティーフィフティーと言われた手術が成功、「奇跡って本当にあるのですね」と執刀医も驚く回復をして、退院することができました。今、振り返っても、すべてが主の守りのうちにあった、と感謝するばかりです。

話は前後しますが、私は今から約二十年前の一九九五年八月に、御代田の福音センターで洗礼を受け、信仰の歩みを始めました。五十九歳の遅い受洗でしたが、年齢だけでなく時間がかかったということでも大変遅いものでした。妻と娘の受洗から十年もかかったからです。なぜ、そんなに時間がかかったか、理由は三つほどあると思います。

第一は、私が人一倍、傲慢(ごうまん)であったことです。家内が信仰を持った時も、どうぞお好きに、ただし私には干渉しないでくださいという態度でした。そのような私が初めて吉祥寺集会所へ行ったのは、家内が洗礼を受けた時でした。洗礼を受ける時ぐらい来てほしい、とせがまれたことと、娘(まみ)が集会にお世話になっていて、そのことに大変感謝していたからです。まみは人間関係のあつれきなどで心が病み、この世に絶望するようになっていて、私はなんとか立ち直らせようと努力しましたがダメでした。その娘が生きる望みを持つことができたのはイエス様のおかげでした。集会の皆さん、特にベック兄とそのご家族には非常にお世話になりました。親として何もできなかった私は、自分の無力さを痛感させられる一方で、目に見えない神様の力、信仰の力というものを認めざるを得ませんでした。しかしそれでも、それは弱い娘に当てはまることであって、自分は違う、自分には信仰は要(い)らない、と思っていました。そういう傲慢な人間だったのです。

第二は、私自身は大きな試練を受けたことがなかった、ということです。もうどうにもならない、神様助けてください、というような状況に追い込まれたこと

がなかった、それで神様を必要としていなかったのです。今、思えば、本当は弱い人間なのに、自分は強いと勘違（かんちが）いをしていて、本当の自分の姿が見えない愚（おろ）か者だった、ということです。

第三は、自然科学に関わる仕事をしていたためです。私は学生時代、科学者になろうと励（はげ）んでいたのですが、大学四年の時、哲学の本などを読んで急に科学者になることに疑問を感じて、あわてて就職を目指し、新聞社に拾ってもらったという、一貫性のない人間です。新聞社では専（もっぱ）ら、科学技術や医学関係、環境問題などの報道、解説、論評に関わって来ました。そして私自身、科学が明らかにした真理こそ信頼できるものだと信じていました。そして、科学の立場には、信仰と相容（あいい）れないものがいろいろありました。例えば、聖書は「まず信じなさい」と言いますが、科学者は「まず疑ってかかります」。科学が「見えないもの」より「見えるもの」を大切する点も、聖書の教えと一致しません。

では、そのような私がなぜ救われたのか、ということですが、自分でも良く分かりません。今、自分の人生を振り返りますと、主が私をずっと導いていてくださったのだな、と感じるのですが、表面的には次のような経過をたどりました。

まず、私が新聞社に勤務していた時には、まれにしか集会に顔を出しませんでした。その状態が変わったのは、新聞社を五十五歳で定年退職して北九州の大学に勤めるようになってからです。初めは単身赴任でしたが、半年後、家内も九州に来ました。九州へ来た妻は、「集会へ行きましょう」と非常にしつこく、私への働きかけをするようになりました。それに押されて、私はいつしか、一週おきに福岡キリスト集会に集うようにさせられていました。そして、初めのうちは、集会ではひたすら時間が過ぎるのを待ちました。

聖書のお話は退屈でしたし、聖歌を歌うのも嫌でした。いつも不機嫌そうな顔をして隅（すみ）の方に座っていました。

そんな状態が三年くらい続いたでしょうか。それから事態が動き出したように思います。集会に出るというより旅行に行くような気分で、喜びの集いに参加することが多くなっていました。九州、四国、関西での喜びの集い（バイブルキャンプ）には、ほとんど参加しました。福岡キリスト集会の中で、どの兄弟姉妹よりも飛び抜けて多くキャンプに参加する未信者、という奇妙な存在になりました。それから、偶然、御代田に別荘が与えられるという出来事も起きました。たまたま招待された結婚式の披露茶話会で、売りに出されている別荘のことをある兄弟から聞いて、「買おう」と決心したのです。救われてもいないし、遠く離れた九州で暮らしている。それなのに御代田の別荘を買う、というのは常識はずれの行為でした。でも別荘を持ったため、夏休みの間、御代田喜びの集いに参加し続けるようになったのです。そしてその頃から、集会に出るのが苦痛でなくなり、知り合いの方も増え、好きな聖歌ができたりしました。そして、ある時、聖歌を歌っているうちに胸が熱くなり、不覚にも涙を流してしまったのです。

多くの交わりを通して、また、みことばや賛美に触れることを通して、主が私の内側に働きかけてくださっていたのだ、と今は思います。その頃、一番強く心に響いたのは、多くの兄弟姉妹方から祈られている、ということでした。自分のために多くの人が祈ってくださっている、ということはいろいろなことで感じ取れます。例えば、初対面の方と挨拶（あいさつ）した時の相手の表情や言葉づかいから、それが感じ取れます。おそらく妻は、周り中の兄弟姉妹に「夫の救いを祈ってください」と、頼んでいたのだと推測されます。そして、その祈りが、不思議な感覚なのです

10 人の証し

Unser HERR lebt

が、何か力を持って私の胸を圧迫しているように感じられたのです。

多くのご兄姉の祈りの圧力のようなものをひしひしと感じながら、私は、自分はなんと傲慢な、嫌（いや）な人間なんだろう、と思うようになっていきました。と同時に、そういう傲慢な性質を改めたい、自分の力に頼った生き方を捨てたい、というような気持ちが芽生（めば）えてきました。そして一九九五年夏の御代田キャンプの前には、もう頑張（がんば）りきれない、と感じるようになっていました。

しかし、最後まで心に引っかかっていたのは、科学の問題でした。科学的な知識と聖書の内容との衝突をどうするのか、という問題です。科学的な真理、客観的な事実や証拠に裏付けられた知識を否定することは、合理的な考えを捨てること、事実に目をつむる行為ではないか、自分自身を裏切ることではないか、と思えて苦しみました。

幾人かの兄弟姉妹は、進化論を否定する書物を贈ってくださったり、私を説得するために交わりに来てくださいました。そのご好意には大変感謝していますが、そういうものは私の疑問に答えてくれませんでした。かえって反発を感じました。けれども、理屈には反発・抵抗できても、祈りには抵抗できませんでした。見えない所で祈られていることには、抵抗のしようがありません。祈りに加えて、集会で目にする兄弟姉妹たちの喜んでいる姿も、こだわりを、少しずつ薄めてくださったように思います。そして、ついに、科学と聖書との問題について納得（なっとく）できなければ受け入れられない、という考えを捨てよう、納得できなくてもいい、分からなくてもいい、と決断するに至ったのです。

受洗を決意する前、ある科学者の友人に「自分は最近、信仰について真剣に考えているけれども、あなたは科学者として聖書のみことばをどう受け止めているのか、科学的知識との矛盾（むじゅん）をどう解決しているのか、意見を聞かせて欲しい」と手紙で意見を訊（き）きました。この友人はクリスチャンで、大学で四年間机を並べた同級生、そして非常に優秀な、人間的にも尊敬できる人です。国立天文台の台長を務め、ハワイのスバル望遠鏡建設計画を実現させた中心人物です。彼からの返事は、私の質問に直接答えるものではありませんでしたが、近況を伝える文章の合間に、「同じ信仰を持つ友人が増えることは嬉しい」とか「自分は多忙でなかなか教会に行けないけど、たまに教会に行って祈る時、心が静まる」とか、「物事を認識する仕方はいろいろあって、科学的な認識だけがすべてとは思わない。別の認識の仕方がある。実際、障害者の人たちは私たち健常者とは違う認識の仕方をする、ということを教えられた経験がある。それから、科学と聖書の問題については、私なりの解釈をしている」といった意見を述（の）べてくれました。完全な回答ではありませんでしたが、私には、それで十分でした。

いま改めて思うのは、科学も所詮（しょせん）はこの世の知恵であり、完全なものではない、ということです。世の中には科学で解決できない問題がたくさんあります。人間の知力には限界があります。そして、科学では解決できないけれども信仰で解決できる問題もあります。

こんな頑固な、おそらくイエス様から一番遠く離れていた私のような者が救われたのは奇跡だ、と自分でも思います。マタイ伝19章26節には「神にはどんなことでもできます。」とあります。私のような者でさえ救われた、ということが、未信者の家族、友人を持つ方々に希望を与えることになれば幸いです。

最後に私のために祈ってくださった多くの方々に感謝します。特に私のために忍耐を持って、集会に誘っ

てくれた家内に感謝しています。そして、これらすべての背後に、主イエス様の愛の御働きがあったことをおぼえ、御名をほめたたえます。

清水洋一
一九三六年七月、東京生まれ。都立新宿高校、東京大学理学部卒。
毎日新聞社（一九九二年定年）、九州女子短期大学（二〇〇〇年自主退職）などに勤務。
毎日新聞社客員編集委員。妻・總子、娘二人。

ことばは神であった

清水　總子


前列左から總子さん、夫の洋一さん、みなさんと

私は一九四〇年生まれ、現在七十五歳です。中学生のころ自分の心の内側に、人と上手に和合できない部分があることに気づきました。自分を変えたいと痛切に思いましたが、努力すればするほど人間関係がうまくいかず、学校での日々は孤独でした。私自身が自分を大嫌（きら）いなのに、他人が私に好意を持つはずはない、と心を閉ざし、ほとんど一人で図書館にこもり、本の世界に慰めを見出していました。

そんな私に大きな転機が訪れたのは、ちょうど四十歳のころ。夫の了解を得て就職活動をし、老人ホームの事務員に採用され、新人研修を受けた時のことでした。ミッション系の職場でしたので、まず聖書が拝読されました。

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を